

クロマグロ養殖の動向

主任研究員 田口さつき

1 経営体数は減少

マグロ養殖は近年、勢いが鈍っている。水産庁が2022年3月31日に発表した「国内のクロマグロ養殖実績」によると、21年のクロマグロの経営体数は88経営体と、事業譲渡などにより18年の95経営体をピークに減少している。

このような状況の背景の1つには、日本政府による太平洋クロマグロの管理強化がある。20年11月27日付の農林水産大臣の指示に基づき、各都道府県は①各県の1年当たりの天然種苗の活込尾数が11年から増加するような養殖漁場の新たな設定を行わず、②生け簀の規模拡大により各県の1年当たりの天然種苗の活込尾数が11年から増加することのないよう漁業権に生け簀の台数等に係る制限または条件を付けている。マグロの養殖場の数は過去最高だった18年の189から頭打ちとなり、21年は187となった。この187の養殖場のうち、人工種苗のみを活け込むよう制限されているのが72養殖場であり、残り115養殖場は天然種苗を活け込む生け簀の台数等について制限がある。

なお、生け簀の数は、過去最高だった16年の1,657台から減少傾向にあり、21年は速報値で1,379台となった。

2 種苗、出荷の動向

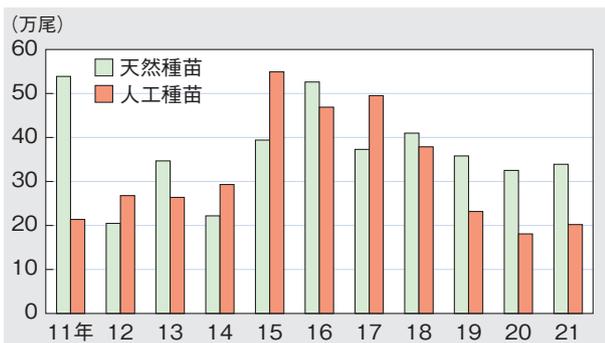
活け込まれた種苗の尾数は、16年の99.5万尾から減少傾向にあり、21年は54.1万尾だった。

クロマグロの資源管理により制限がかかっている天然種苗だけでなく、むしろ人工種苗の方が減少は著しい(第1図)。コロナ禍で需要が落ち込むなか、活込が抑制されているものと思われる。全活込種苗のうち、天然種苗の割合は、15年に41.8%まで低下したが、19年から3年連続で60%を超えている(第2図)。

天然種苗が30cm以上の大きさである一方、人工種苗は5cm程度と天然種苗の大きさになるまでに死亡することが多く、経済的な理由から天然種苗の利用は今後も続くとみられる。

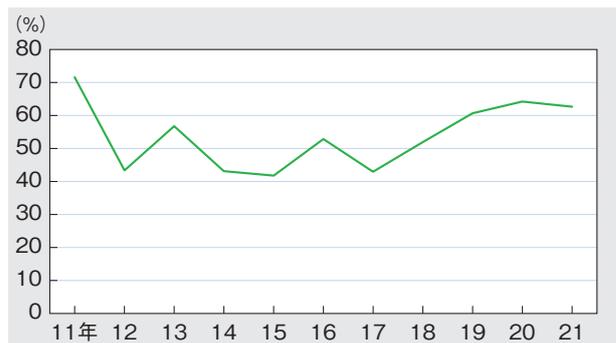
出荷尾数は、19年の30.2万尾に迫る29.7万尾であった(第3図)。うち、人工種苗(から育てたマグロ、以下同じ)は3.5万尾で、過去最高となった20年の6.3万尾から大きく減少した。出荷

第1図 養殖クロマグロ種苗活込状況



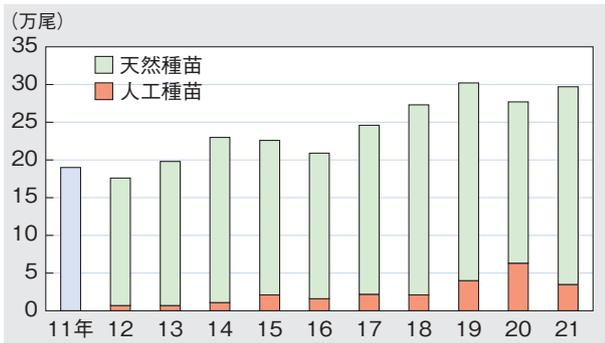
資料 水産庁「令和3年における国内のクロマグロ養殖実績」

第2図 天然種苗が全活込種苗に占める割合の推移



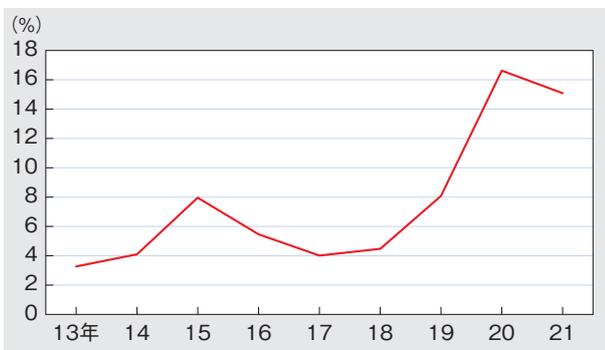
資料 第1図に同じ

第3図 養殖クロマグロ出荷状況(尾数)



資料 第1図に同じ
 (注) 11年は、天然種苗数と人工種苗数が不明。

第4図 人工種苗の生存率の推移



資料 第1図に同じ
 (注) 生存率=出荷尾数÷3年前の活込尾数×100。

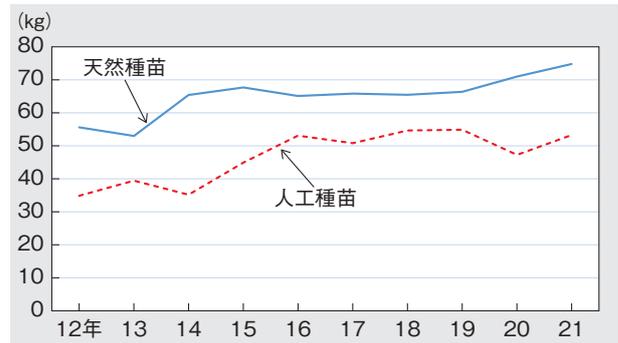
尾数のなかに占める天然種苗の割合は21年で88.2%と依然高い。出荷重量は、21年は21,460トンと過去最高となった。うち、天然種苗が19,596トンと全体の91.3%を占めた。

3 マグロ養殖の変化

公表された数値から技術的な変化も読み取れる。例えば、人工種苗が3年間飼育だとして、生存率(出荷尾数を3年前の活込尾数で割り、百分率としたもの)を表すと(第4図)、20年以降は15%を超えている。

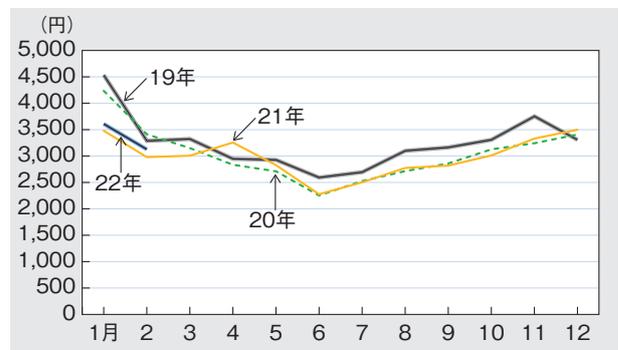
出荷重量を出荷尾数で割った1尾当たりの重量は増加傾向にある(第5図)。特に天然種苗の大型化が進んでおり、21年は1尾当たり過去最高の74.8kgとなった。なお、人工種苗は53.3kgであった。ただ、コロナ禍による需要の落ち込みを受けた意図せざる大型化とい

第5図 出荷クロマグロの1尾当たりの重量の推移



資料 第1図に同じ

第6図 クロマグロの価格推移(1kg当たり)



資料 東京都中央卸売市場「市場統計情報」
 (注) クロマグロ(国内)鮮魚の価格。

う見方もある。

4 今後の見通し

今後のクロマグロ養殖を考えるうえで、重要な指標であるクロマグロの販売価格は、コロナ禍による需要の減少を受け、下押し圧力が働いている(第6図)。販売価格の低迷が続く場合は、今後も活込の抑制が継続するとみられる。

また、餌となるサバ類の価格の動向にも注意が必要である。サバ類から比較的安価なマイワシへ餌をかえる動きも進むと思われる。ただ、現在、原油価格の急騰などもあり、餌となる魚類の価格も全体的に上昇圧力が働く可能性がある。

(たぐち さつき)